

CHUBU DX HUMAN RESOURCE PLATFORM

名古屋工業大学 リカレント教育事業



林 直孝

名古屋工業大学 産官学金連携機構 特任准教授
一級建築士

経 歴

○建築職として行政の仕事に長く関わる

○2019年～

- ・愛知県庁で、STATION AI事業、スタートアップ支援事業（海外・国内）に関わる（※途中、Tus holdings（ベンチャーキャピタル）に派遣）

○2025年～現在

- ・名古屋工業大学でディープテックスタートアップ支援、アントレプレナーシップ教育、リカレント教育に関わる

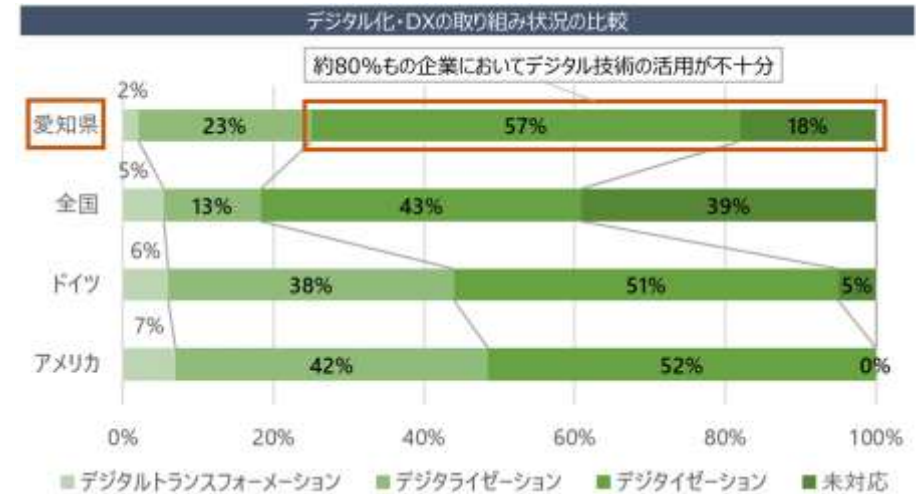


中部DX推進人材育成プラットフォームの背景

<背景>

近年、世界中では、ビッグデータ解析等の**デジタル技術導入による第4次産業革命（モノづくり革命）**が加速している。日本でもデジタル技術活用によって、様々な社会課題を解決することを目指しているが、**日本の企業はデジタル技術の活用という面では遅れている。**

本学が位置する愛知県は製造品出荷額が47年連続1位の“ものづくり県”であるが、ものづくりが盛んな**本地域ですえデジタル技術の活用が不十分**と言われており、我が国の産業競争力の低下が懸念されている。また経済産業省が行った今後のIT人材需給の推計によると、企業におけるDXの推進等を背景として、IT人材の供給は**2030年までに最大80万人程度不足**すると推計されている。



出典：愛知県「デジタル技術活用促進調査の結果について」(2022)

<現状>

- デジタル技術を**十分に活用できていない企業は75%**にのぼる
- デジタル化・DXを推進する**人材が全国的に不足**している

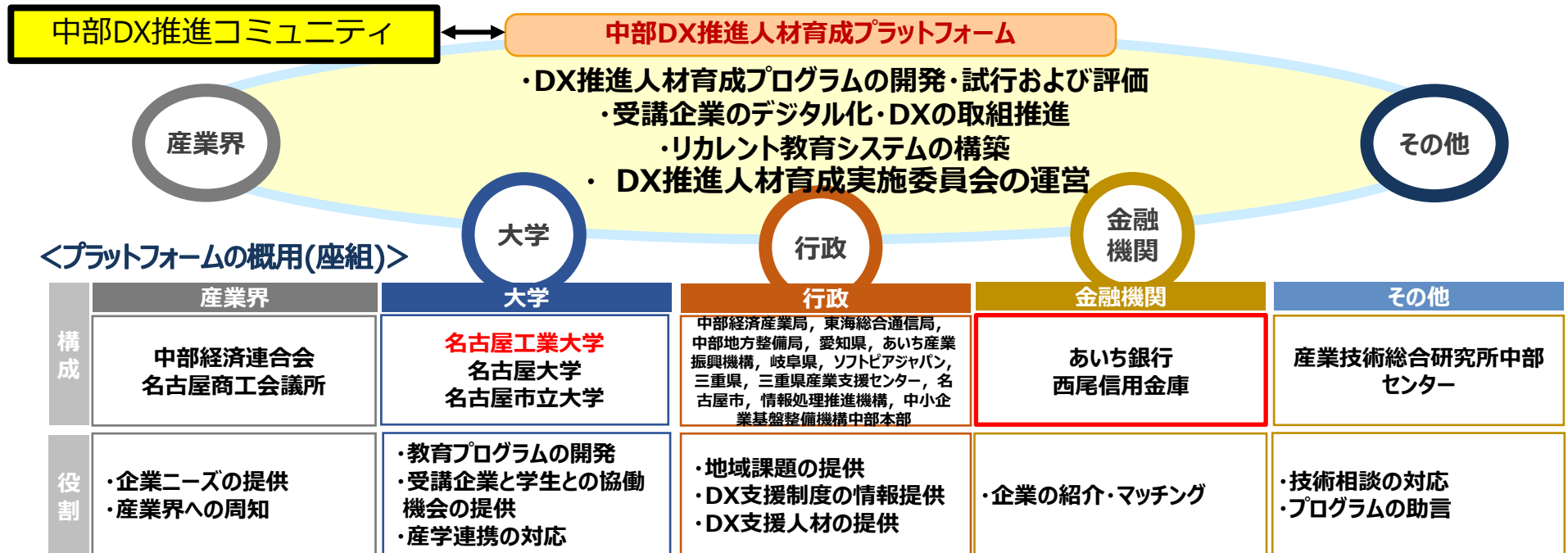
本地域の取組

<中部DX推進コミュニティ（情報交換の場）>

地域の関係機関と協働し、地域企業のデジタル化やDX（デジタルトランスフォーメーション）をさらに推進するため、中部地域の産学官が協働する「中部DX推進コミュニティ」を発足（2022年3月/中部経済産業局）

中部DX推進人材育成プラットフォームのメンバー構成

名古屋工業大学：中部DX推進人材育成プラットフォーム



プラットフォームの特徴

- 地域企業のデジタル化やDXをさらに推進するため、地域の産学官が協働して活動
- 産学連携体制の講師陣の実践的な教育プログラムに加えて、支援機関の伴走支援によりデジタル化・DX推進をサポート

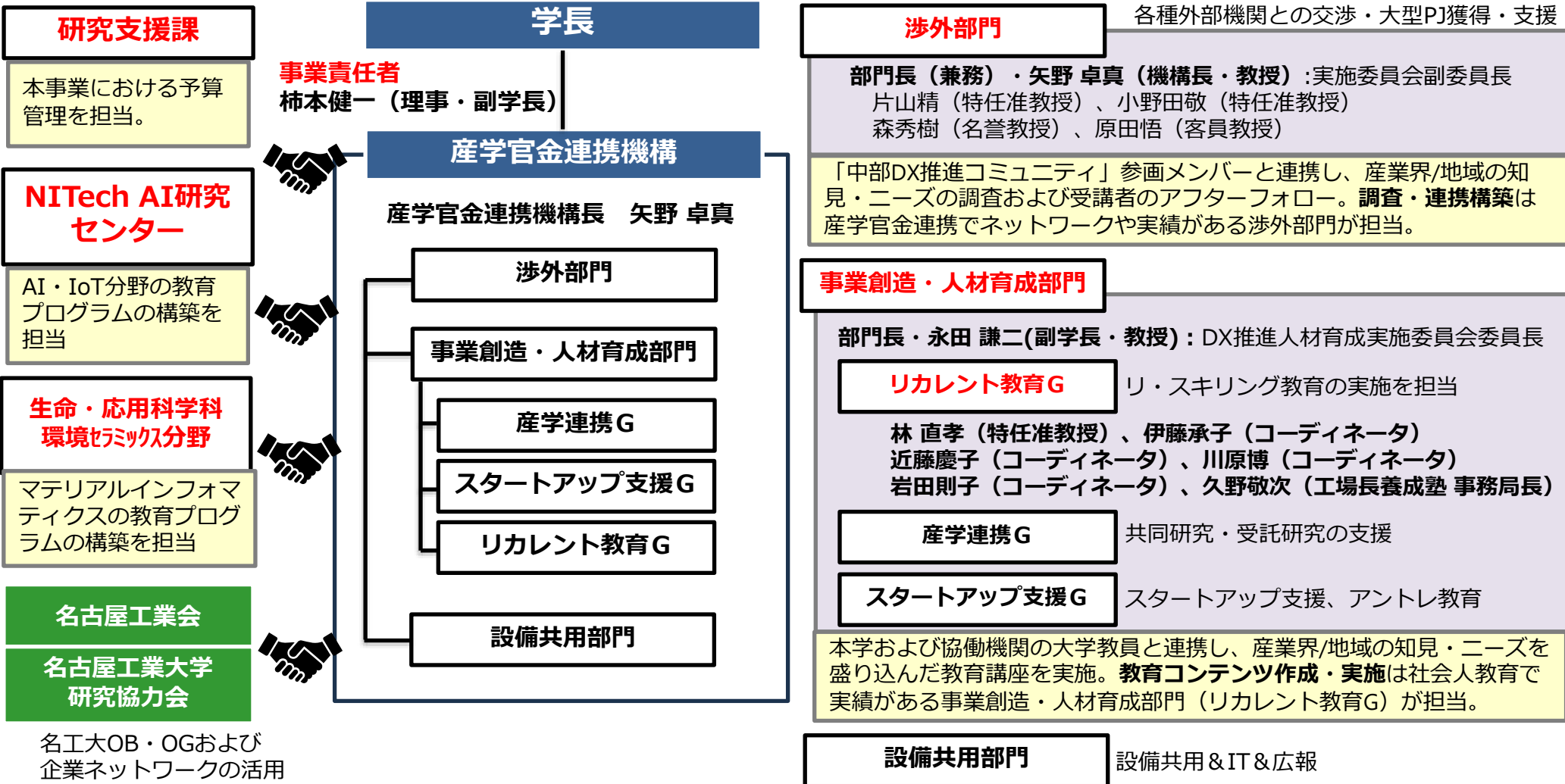
プラットフォームで取り組む地域課題

- 欧米諸国と比較して、本地域を含む日本の多くの企業はデジタル技術の活用が遅れており産業競争力の低下が懸念
- デジタル技術を有するIT人材が不足しているためDX推進人材の確保が困難

名古屋工業大学のリカレント教育の実施体制

学内実施体制 ※赤文字の部署が事業を担当

名古屋工業大学の実施体制として、学長直属の産学官金連携機構の渉外部門（企画）と事業創造・人材育成部門/リカレント教育G（プログラム実施）が中心となり本プラットフォーム構築支援事業を運営し、NITech AI研究センターの教員が教育プログラムの推進を担当する。



本事業では先進事例のセミナーをはじめ、**デジタル・DX推進人材を育成する教育プログラム**をレベル別プログラム（ベーシック，キャップストーン）で提供する。

ベーシックプログラム

教育プログラム受講者が「ブリッジ人材」となり、ITベンダー等の外部機関と連携することでデジタル化・DXを推進



キャップストーンプログラム

教育プログラム受講者自身でデジタル化・DXを推進し、社内業務の効率化、新規事業創出を実現

キャップストーンプログラムの一例

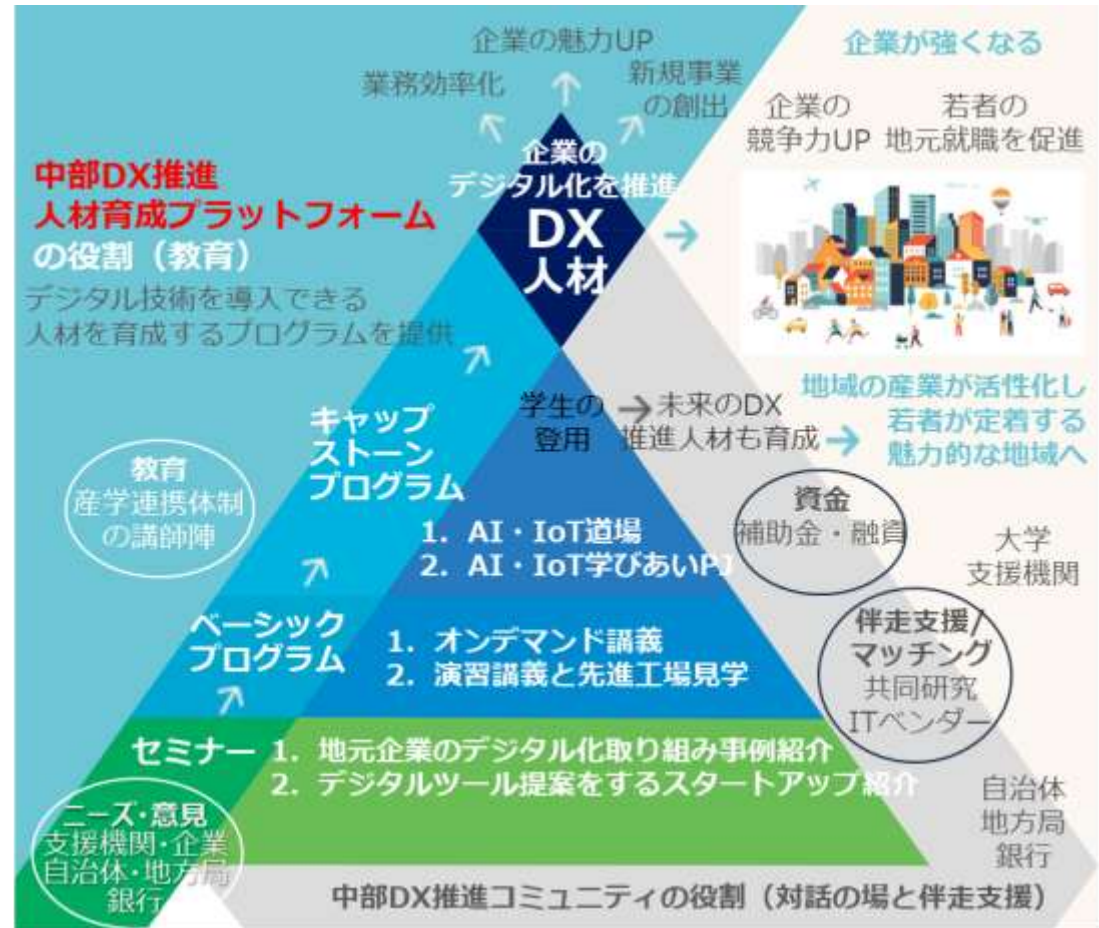
AI・IoT道場

NITech AI研究センターの研究室に入って、自社の課題解決に向けた研究開発を実施（卒研レベル・大学院レベル）

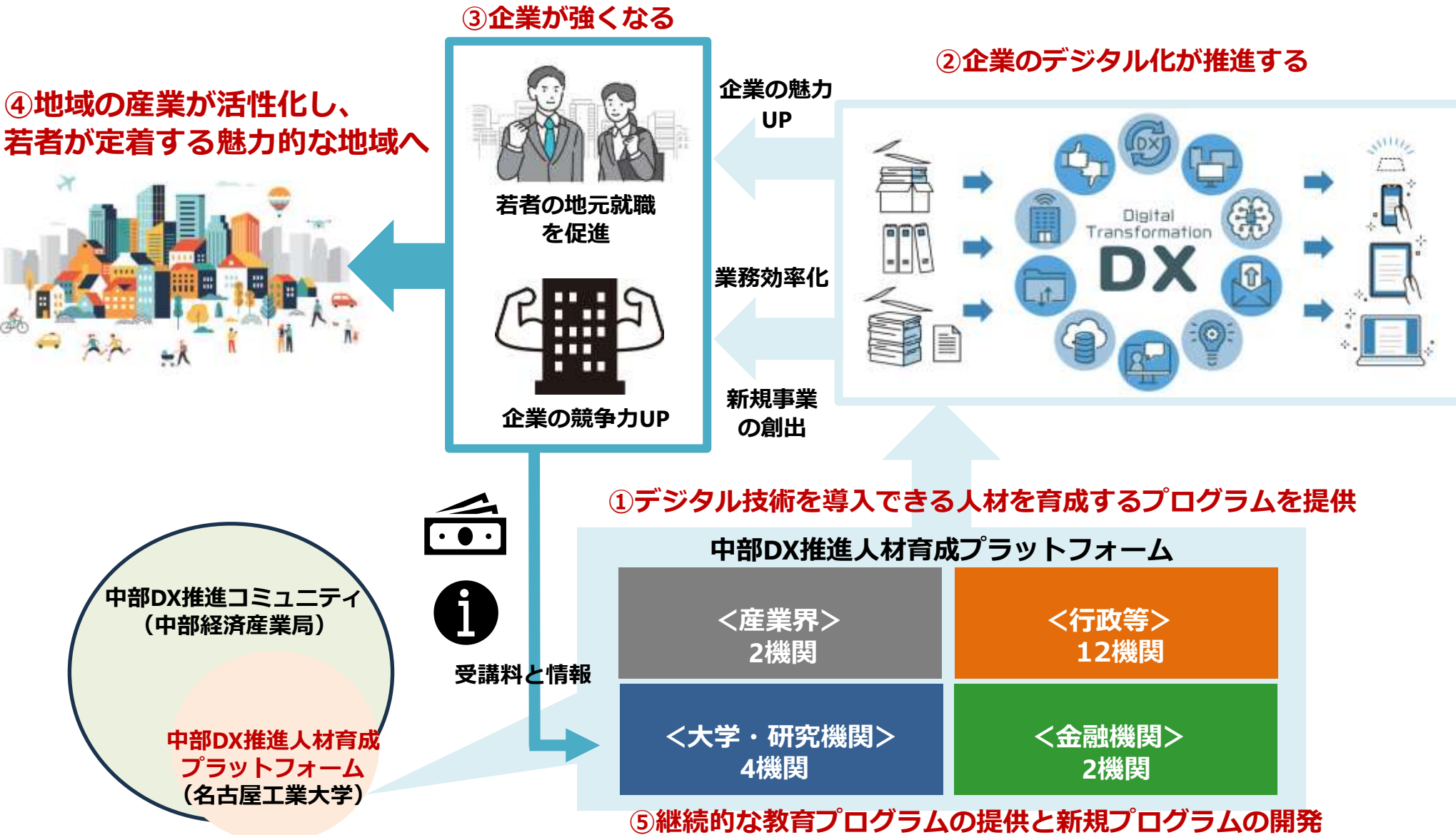


加藤センター長

中部DX推進人材育成プラットフォーム内に相談窓口を設置し、協働機関やITコンサルと連携して伴走支援



中部DX推進人材育成プラットフォームで目指す未来



① デジタル化・DXへの認知不足を解決

<地域中小企業の声>

- ✓ デジタル技術の活用は必須と感じるものの、どのように活用すべきかイメージが湧かない
- ✓ 身近な事例が不足しており、自社でどのようにデジタル技術を活用すべきか分からない（活用イメージの不足）

② 自社ビジネスを把握し、かつデジタル技術を理解した「ブリッジ人材」の不足を解決

<地域中小企業の声>

- ✓ ITベンダーと意思疎通を図るための専門用語を理解し、自社の要望をITベンダーに伝達できる能力が必要
- ✓ 自社ビジネスを把握し、デジタル技術を理解した人材が不足

現場担当者向け
プログラム

目指す学修効果

現場担当者にデジタル技術の活用の基礎を習得させ、「**自社の要望をITベンダーに伝達**」できる

③ 経営者＋現場の両輪での推進が必要

<地域中小企業の声>

- ✓ ある程度は現場主体でも推進することができるが、全社的な取組にしていくためには経営者の理解が必要
- ✓ 経営者はDX推進の目的や効果について現場と認識を共有することが重要

経営者向け
プログラム

目指す学修効果

ビジネス全体を把握し、「**デジタル技術導入の可否を決定**」できる人材へと育成

ベーシックプログラム

受講料は1名または1社 5万円
※名工大研究協力会の会員は無料

プログラム名 (講師)	対象者	プログラム内容	学修目標
IoT演習講座 (大塚准教授/名古屋工業大学) <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block; color: red; font-weight: bold;">対面</div>	製造業務に携わる管理者と実務者	IoTシステムの基礎とリミテーションについて説明するとともに、実際にデバイスを用いて実社会の問題解決のためのグループワークを行うことで実現場でのPoCまで行うことができることを目的とする。	<ol style="list-style-type: none"> 1. 取得したいデータに対し最適なセンサを選択することができる。 2. 取得したセンサデータをWi-Fi等の無線により収集することができる。 3. 収集したデータをPCを用いてある程度のデータ解析が行える。
経営者向けAI実務講座 (鈴木氏/Rsfact) (鵜飼教授/名古屋市立大学) <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block; color: red; font-weight: bold;">WEB・一部対面 オンデマンド</div>	ChatGPTなどの生成AIツールは日常的に利用しているが、それ以上の活用ができていない経営者	顧客、ITベンダー双方が共通のゴールを目指すためには、「要件」ではなく「要求」を握る必要がある。本講義ではプロジェクトが上手く進むためのITベンダーとの付き合い方を学ぶ。また生成AIを活用したプロジェクトを実践できる講義も準備している。	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自社とITベンダーの役割分担を理解し、期待値を適切に設定できる。 2. 生成AIプロジェクトのパターンを理解する。 3. 自社で推進すべきプロジェクトの全体像を描けること。
トヨタ流業務の効率化・価値創造講座 (藤原特任教授/名古屋工業大学) <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block; color: red; font-weight: bold;">対面</div>	企業の経営者、管理職、中堅社員	業務効率化の定義、目的別の進め方、改善・改革の考え方と方法（デジタル技術を含む）、実施計画の作り方など（演習を含む）を学ぶ。また価値創造（新規事業提案）の手順と分類、アイデア発想の考え方と方法（生成AIの活用を含む）など（演習を含む）を学ぶ。	<ol style="list-style-type: none"> 1. 業務の効率化（改善・改革）の考え方と方法を理解し、自身の仕事で活用できる（効率化のアイデアを発案している） 2. 価値創造の考え方と方法を理解し、自身の仕事で活用できる（新規事業のアイデアを発案している）
工場長養成塾～DX版～ (田中客員教授/名古屋工業大学) (當仲氏/ユニバーサル・シェル・プログラミング研究所) (鬼頭氏/協和工業) <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block; color: red; font-weight: bold;">対面</div>	ものづくりに携わる企業の経営者、管理者と実務者	DX推進の基盤づくりをどのような考え方で進めていけば良いかについて、ケース研究を交えて理解を深め、DXの具体的な進め方を修得するとともに、実際にDXに取り組んでいる工場を見学し、最適化と戦略的原価システムづくりを目指す姿や、社員が自ら課題を発見して解決する文化に触れる。	<ol style="list-style-type: none"> 1. システムズアプローチの考え方が分かる。 2. DXの意義を理解し、正しいITリテラシーを習得し、疎結合型システム開発手法の概要と基本を理解できる。 3. 現場改善とシステム構築することの重要性を理解できる。

プログラム名 (講師)	対象者	プログラム内容	学修目標
AI活用の基礎講座 (加藤教授/名古屋工業大学) (佐久間助教/名古屋工業大学) (伊原氏/サイバーエージェント) オンデマンド	企業で業務効率化や計画立案に関わる管理者・実務担当者	機械学習ならびに最適化に関するAI活用の基礎理論から応用事例について要点解説する。基本的なアルゴリズムと解法の選択活用事例を紹介し、例題演習などを通じて、類似課題を自身で解決できる力を身につける。	1. 最適化の基本的な考え方と代表的手法を理解できる。 2. Pythonを用いた基礎的な最適化プログラミングができる。 3. 機械学習と組み合わせた応用の可能性を理解できる。
サイバーセキュリティ講座 (越鳥名誉教授/名古屋工業大学) (橋本名誉教授/名古屋工業大学) (佐々木氏/Forehacks) オンデマンド	情報システム担当者・現場責任者	工場や設備を対象にしたサイバーセキュリティ対策について広範囲に学ぶ。最新のサイバー攻撃の事例や、ビジネスを取り巻く規制面から、安全を意識したサイバーセキュリティ対策の必要性を理解し、組織としての取り組みのあり方を考える。	1. OTセキュリティの必要性を説明できる。 2. Cyber Security Frameworkをもとに、中核人材の必要性とその役割を説明できる。 3. 自社へのサイバー攻撃のシナリオを検討できる。
ロボット導入講座 (永井氏/ヒューマテックジャパン) オンデマンド	生産性向上につながる設備やシステムの提案・導入を担う企業の技術者	産業用ロボットを活用したシステム導入の為の産業用ロボットの知識を習得すると共に「システム構想」、「ロボットの安全」、「導入後の運用と改善」など生産性向上を継続できる人材を育成する。	1. 生産現場の工程分析、工程設計を行い、産業用ロボットを導入しやすい環境を構築できる。 2. ロボットに関する法令や規格を理解し、安全なロボットシステムの構想を検討できる。 3. ロボットとその周辺機器の構成を理解し、対象製品に適したシステムを構築することができる。
データ科学の基礎講座 (教材：名古屋大学数理・データ科学・人工知能教育研究センター) オンデマンド	DXを推進するための統計学やプログラミングなど基礎的な知識を修得したい方	DXを推進するデータサイエンティストになるための事前学習として必要となる統計学の基礎とデータ解析理論を、用語や基礎方程式を中心に、講義と演習に基づき平易な数学の範囲で教授する。	1. 統計学の基礎と、多変量解析や時系列解析など古典的なデータ解析理論理解できる。 2. 統計や解析の用語を理解し、基礎方程式を活用できる。 3. データ解析ツールの基本的な利用ができる。

ベーシックプログラムの講座運営

営業先の企業（中小企業）から、現場で使える実践的なスキルを修得したい、実際にDX推進をしている現場を見たいという意見が得られたため、講義だけでなく**演習を多く含むプログラム**を提供し、事例紹介として**工場見学**を実施した。

IoT演習講座 (全6回)	第1回	10/1(水)	IoTとその応用(最新技術動向とサービスを俯瞰)	学内
	第2回	10/8(水)	センサの特性とネットワーク構成&ペーパープロトタイピング	学内
	第3回	10/15(水)	Arduinoとセンサを接続してみよう	学内
	第4回	10/22(水)	ESP32マイコンでWi-Fi通信をしてみよう	学内
	第5回	10/29(水)	プロトタイピング(何らかのデータを取るシステムを作ってみよう)	学内
	第6回	11/12(水)	プロトタイピングと評価 / 講評と未来のIoTシステムについて	学内
経営者向け AI実務講座 (全4回)	第1回	10/17(金)	失敗しない「要求」定義 / ITベンダーとの付き合い方	学内
	第2回	10/21(火)	明日から始める生成AIぶろじえくと	オンライン
	第3回	10/24(金)	動画を活用した技術伝承 / AIエージェント革命	オンライン
	第4回	10/22(水)	デジタル化戦略とその費用対効果の考え方	オンデマンド
トヨタ流業務の効率化・ 価値創造講座	トヨタ流業務の効率化と価値創造型商品(事業)企画のステップ ①9/29(月)・②10/6(月)・③10/27(月)・④11/17(月)			学内
工場長養成塾～DX版～	①DXの考え方と進め方 11/4(火)・②DXの実例 11/11(火) ③先進工場見学 協和工業(株)長浜工場 11/21(金)			①②学内 ③現地(バス)

ベーシックプログラムの講座運営

営業先の企業（中小企業）から、数日間も社員を大学に送り込むのは難しいという意見が得られたため、可能な限り**オンデマンド教材を準備**した。オンデマンド教材については、準備のできたものから順に配信を開始した。

AI活用の基礎講座

- AI基礎:Pythonプログラミング導入、機械学習、深層学習(CNN)の基礎演習
- 最適化:最適化の座学、数理最適化、組合せ最適化、メタヒューリスティクス
- 事例紹介 等 90分×7回

オンデマンド

サイバーセキュリティ講座

約10時間 講義と演習
工場等の制御システムが攻撃されるサイバーリスクを把握し、対策を講じることができる人材を育成する講座

オンデマンド

ロボット導入講座

約10時間 講義
ロボットシステム導入の提案・設計及び構築を行う人材を育成する講座

オンデマンド

データ科学の基礎

約8時間 データ科学の基本的な事項
データサイエンスの役割、基礎的な数学などについて学習する講座

オンデマンド

※ベーシックプログラムは、講座を選択して受講できますが、各講座については全日程を受講していただきます。

IoT講座：受講者の技術習得について

DXに関連する技術について、明日からでも使える実践的な講座を提供した。**プログラミング未経験者の受講者がIoT演習講座を受講後に、IoTデバイスを自ら設計し、生産ラインの無人監視システムを作成した。**

システムの仕組み

- ①生産設備22台にIoTデバイスを設置し、製品を1つ加工するごとにサーバーに信号を送信（写真1）
- ②サーバーは信号を受け取り、生産状況をリアルタイムでモニターに表示（写真2）
- ③データは記録され、自動的に担当者の業務PCに送信（写真3）



写真1. 設備側 IoTデバイス



写真2-1. 現場に設置したモニター



写真2-2. 当月の生産計画に対する進捗状況



写真2-3. 全設備の稼働状況の把握



写真2-4. 各設備の稼働状況

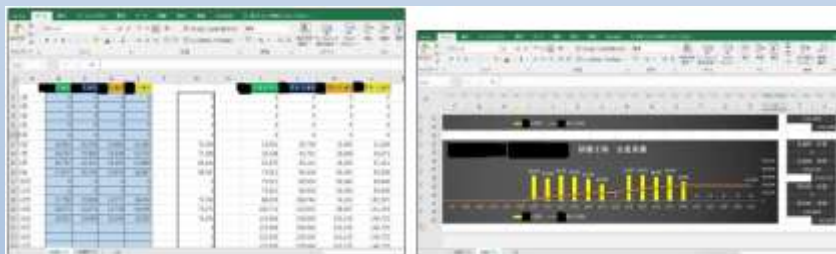


写真3. 担当者のパソコンに自動でデータを送信

システム導入の効果

- ①設備全体の動きが見えるようになり、計画どおりに進捗しているかをすぐに確認できるようになった。
- ②生産数の集計が自動になり、現場での作業が不要になった。



受講者が独り立ち！

受講状況（ベーシックプログラム）

ベーシックプログラムの受講状況は以下の通りで、各講座の合計受講者数は133名（複数受講あり）となっている。参加企業数はのべ72社であった。

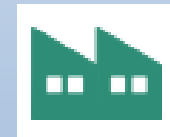
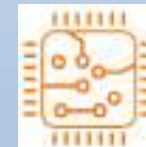
講座別参加状況（複数受講あり）（赤文字はオンデマンド講座）

講座名	参加企業数	受講者数
AI活用の基礎講座	16	48
IoT演習講座	2	2
経営者向けAI実務講座	12	15
工場長養成塾～DX版～	5	9
業務効率化・価値創造講座	5	6
サイバーセキュリティ講座	7	12
ロボット導入講座	9	14
データ科学の基礎講座	16	27
のべ参加数	72	133

（参考）名工大研究協力会会員・非会員の内訳

		参加企業数	受講者数
会員	既会員	22	69
	新規入会	5	11
非会員		9	15
計		36	95

※今年度は研究協力会会員企業様 受講料無料

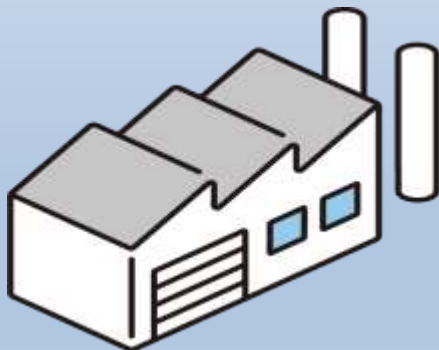


受講者情報① (ベーシックプログラム)

受講者の特徴として愛知県内からの参加が多く、業種としては製造業が多く見られた。中でも「プラスチック製品製造業」「電気機械器具製造業」「輸送用機械器具製造業」の企業は多く、全体の約半数を占めている。

本社・拠点別参加状況

県別	参加企業数	受講者数
愛知県 (名古屋市を除く)	19	48
名古屋市	12	38
岐阜県	3	6
三重県	2	3
計	36	95



今後は製造業を重点ターゲットとし、営業・運営を行う。

業種別参加状況

業種	参加企業数	受講者数
総合工事業	1	4
繊維工業	2	2
化学工業	3	7
プラスチック製品製造業	6	21
窯業・土石製品製造業	2	2
金属製品製造業	4	8
生産用機械器具製造業	1	1
電子部品・デバイス・電子回路製造業	1	1
電気機械器具製造業	3	10
情報通信機械器具製造業	1	7
輸送用機械器具製造業	3	22
情報サービス業	2	2
機械器具卸売業	1	2
協同組織金融業	1	1
専門サービス業	3	3
学校教育	1	1
廃棄物処理業	1	1
計	36	95

受講者情報②（ベーシックプログラム）

受講者の役職情報は以下の通りである。役職については管理職に該当する役職の方々が多く、詳細な業務内容については「管理・運営もしくはその補佐」「システム導入や対策の企画・計画・検討」が多く見られた。受講者情報と受講講座の関係性については引き続き調査を進めていく。

役職別参加者数

役職名	参加人数
代表者	3
取締役	5
執行役員	1
部長・次長	6
課長	7
係長級	27
一般、担当等	39
その他の役職	7
計	95

担当業務（複数回答）

担当業務	参加人数
管理運営責任者・指導者	18
管理運営もしくはその補佐をしている	24
システム導入や対策の企画・計画・検討	23
システムに関する研究開発	1
製品の研究開発	8
人材育成	1
空欄	35
計	110

システム導入や運営管理に関心が高い層が多いと考えられるため、課題解決や業務効率化に関して、当該プログラムが提供できるメリットを伝え、より多くの企業に参加いただけるような営業・運営を行っていく。

キャップストーンプログラム

デジタル技術の基礎知識を身に着けた受講者が、大学の研究者の指導を受けて、自社の課題の解決を目指すワンランク上の教育を提供する。「AI・IoT道場」では企業の課題を研究テーマにして教員の指導の下、研究（卒業研究レベル）を実施する。また「AI・IoT学びあいプロジェクト」では教員の指導の下、学生と企業が協力してデジタル技術を活用して企業の課題解決に取り組む。

現場担当者向け

対象：大企業・中小企業

「AI・IoT道場」 名工大の研究室で研究開発（卒業研究レベル）



企業の課題を研究テーマにして、
教員の指導の下、研究に取り組む

AIやデータ解析であればTeamsやZoomを使用した遠隔指導が可能。企業側も派遣しやすくなり、受講生も負担軽減になる。

受講料：210万円/人・年

現場担当者向け

経営者向け

対象：中小企業

学生と企業の 「AI・IoT学びあいプロジェクト」



教員の指導の下、学生*と企業が協力して
企業の課題解決に取り組む

近隣の中小企業に対し、企業の抱える課題の解決を促す支援を行う。この事業に関わるすべての者が協働し、相互に学び合うことを目的としたプロジェクト。企業と学生が互いを知る場

受講料：50万円/人・年

実践的な能力を身に着けて、自社のDX化を推進できる人材に育成する

キャップストーンプログラム講座運営

AI・IoT道場



現場担当者向け

「AI・IoT道場」名工大の研究室で研究開発(卒業研究レベル)

企業の課題を研究テーマにして教員の指導のもと、
研究に取り組みます

本講座では、企業が抱える実際の課題を研究テーマとして取り上げ、教員の専門的な指導のもと、卒業研究レベルの高度な研究を実施します。AIやデータ解析分野では、TeamsやZoomなどのオンラインツールを活用した遠隔指導が可能で、企業側の人材派遣の負担軽減や受講生の学習環境の柔軟性向上につながります。主にAI・IoT技術を活用し、実践的なスキルを身につけることで、自社のDX(デジタルトランスフォーメーション)を推進できる人材の育成を目指します。企業と教育機関が連携し、現場で活躍できる即戦力を育てる実践的な講座です。

さらに詳しく →

対象：大企業 中小企業

受講料 100万円/人・年



AI・IoT学びあいプロジェクト



現場担当者向け

経営者向け

名工大の学生も参加して企業の課題解決

学生と企業が協力して教員の指導のもと、
企業の課題解決に取り組みます

本講座は、学生と企業が協力し、教員の専門的な指導のもとで、企業が抱える課題に取り組む実践的な学習プログラムです。特に近隣の中小企業が直面する経営や技術的な課題に焦点を当て、AIやIoTなどの先端技術を活用して解決を図ります。事業に関わるすべての人が共同し、互いに学び合うことを目的としており、企業と学生が相互理解を深めながら、共に成長できる場を創出します。企業の人材育成や地域のDX推進にも貢献する取り組みです。

さらに詳しく →

対象：中小企業

受講料 25万円/人・年





受講者自身の修了後アンケートおよび、受講者を派遣していただいた企業へのヒアリングの結果

<修了者アンケートより>

●理解度(10段階評価)

	1~3	4~6	7~10
実数	3	30	46
構成比	4%	38%	58%

●満足度(仕事に役に立つ度合い10段階評価)

	1~3	4~6	7~10
実数	7	25	47
構成比	9%	32%	59%

●学修到達目標達成度平均(10段階評価)

	1~3	4~6	7~10
実数	5	32	42
構成比	6%	41%	53%

※79名のうち14名はデータ科学の基礎講座受講で、2度回答

<受講企業へのヒアリングより>

●派遣元企業の評価(5段階評価)

	1~2	3	4~5
実数	2	2	11
構成比	13%	13%	73%

【良かった点】

- 受講者に応じて必要な機器を購入してもらえ、与えられる課題ではなく**自社課題に即したプロトタイプ**を作ることができた。(IoT演習)
- アプリケーションの自社開発の道筋を示していただいた。(経営者AI)
- 1社のDX事例を深掘りしていただいたことで、**DXの企画から運用までを具体的に知る**ことができた。(経営者AI)
- AI活用の事例を提示してくれてわかりやすく、実際に活用することでの**業務効率アップを体験**することができた。(業務効率化・価値創造)
- 講義でグループディスカッションできたことが良かった。(工場長養成塾DX)
- 工場見学で実例を見ることができ、**苦労した点を交えて説明していただき**共感できる部分があった。(工場長養成塾DX)
- Pythonコードを走らせながらのデータ処理は理解の手助けになった。(AI活用の基礎)
- 実用性を重視した解説で、コードレベルでの業務への活用方法がイメージしやすかった。(AI活用の基礎)
- ロボットの多メーカーの情報が扱われており、見識を深めることができた。(ロボット導入)
- 基礎から丁寧に説明されており、資料も説明を飛ばさず書かれており、**初学者でも学びやすい教材**だった。(データ科学の基礎)
- 講座毎に確認テストがあり、理解度を把握できた。(データ科学の基礎)



受講者自身の受講後アンケートおよび、受講者を派遣していただいた企業へのヒアリングの結果

【改善点】

- プロトタイプの作成が始まったら隔週にして、自分で作成する時間が多い方がよかった。(IoT演習)
- より細かい他社事例(導入のやり方、勉強方法)を紹介してもらいたかった。(経営者AI)
- 機密の関係で難しいところもあると思うが、**グループディスカッション**等があると理解がより深まると思った。
(業務効率化・価値創造)
- 様々な職種の事例があると、自身の職場との整合性が取りやすいのではないかと思う。(工場長養成塾DX)
- 専門的過ぎて**全く基礎ではない**と感じた。(AI基礎)
- 初級、中級、上級など分けるものよいかと思った。(AI基礎)
- 最適化の手法で**具体的な使用例**があったりするとよかったかなと思う。(AI基礎)
- 全体のボリュームは適量と思われませんが、**1回あたりの時間が少し長く感じた**。(AI基礎)
- 28回の講義に対して**受講可能期間が短かった**。(データ科学の基礎)

【企業から派遣する際の課題・要望】

- 週に2日まで、2か月、3か月、などの体制だと参加し易い。
- 時間帯は**平日希望**。長期期間となると移動時間など時間確保が難しい為、**オフ&オンライン併用**が好ましい。
- 中小企業向けに、小規模かつ安価な講座も用意してほしい。

【経営者が学び経営に反映することの悩みや課題】

- 研修の目的と自組織の経営視点の目標が必ずしも合致しない。
- インプットしたことを経営にすぐ反映することは厳しいが、**生産性向上が見込める**と判断した際は取り組む。

【受講結果を処遇に反映することへの悩みや課題】

- 今回の受講対象の**基礎講座は教育視点**のため処遇への反映は難しいと考える。
- 受講者の**レベルアップが主目的**で受講させるため、社内の処遇に反映する仕組みがないのが現状。

【企業から派遣を促すための工夫・調整】

- **オンデマンド形式**を充実させることで開催時間に縛られず自己啓発としての参加を誘発できる可能性ある。
- 業務都合により参加できない回が発生した場合、**動画等による補習**ができると助かる。

【企業経営に反映することについて事例/今後の取り組み】

- 営業日報のクラウドサービスについてはうまく浸透出来た。
- まずは社員に経験させて**利用価値がある**と思ってもらうことが重要。具体的に決めて日常的に利用する機会をつくる。

【受講結果を処遇に反映することの事例/今後の取り組み】

- 受講内容を元に**実務で成果を上げる**ことで、初めて処遇への反映が検討されるのが一般的かと思う。
- 受講修了後に発行される**デジタルバッジ**が、既存の国家/民間資格のどの部分に相当するかを社内で評価し、人事制度の観点から**評価基準に組み入れる**等の検討材料になる。

セミナーの開催実績について

年間を通じて4回のセミナーを開催し、DX推進の基礎からサプライチェーンの課題、工場での実践事例まで幅広く取り上げた。講演や企業事例紹介に加え、工場DXの現地見学も行い、実践的な学びの機会も提供した。最終回では、実績報告や質疑応答、交流会などを行った。

第1回

日時：9/18
 会場：ホテルメルパルク名古屋（ハイブリット）
 定員：先着70名
 参加者：135名（うち会場参加は57名）

<内容>

- ・オープニング講演
- ・DX推進企業の取り組み事例の紹介
- ・トークセッション
- ・名刺交換・情報交換会



第2回

日時：11/28
 会場：名古屋工業大学 16号館 205号室
 定員：30名
 参加者：22名

<内容>

- ・セキュアな工場DXの進め方
- ・サプライチェーンにおける課題
- ・グループディスカッション



今年度 文科省「産学連携リ・スキリング・エコシステム構築支援事業」




今年度も後継の事業が実施されるため、本学も申請を準備します。
昨年度の結果を踏まえて、来年度に強化する点として赤色点線の項目について検討を進めます。



重点的に実施する事項

公募の際、厳格に評価しメリハリ付け




■ 現下の課題に選択的に対応

 個人	<ul style="list-style-type: none">アドバンスト・エッセンシャルワーカー育成就職氷河期世代支援参加しやすいオンラインプログラム構築
 企業	<ul style="list-style-type: none">スキルの可視化や正当な評価による処遇改善産業構造審議会などで示される新たな人材需要への対応
 大学	<ul style="list-style-type: none">全学的経営改革<ul style="list-style-type: none">✓ 教員のインセンティブ向上✓ 事務体制強化✓ 修士課程への接続等

■ 企業からの投資を含む収益計画の確認

目指す状態

産学官連携によるリ・スキリング・エコシステムの構築

 個人	<ul style="list-style-type: none">働きながら学ぶ社会人の増加リ・スキリングによる処遇改善
 企業	<ul style="list-style-type: none">リ・スキリングを積極的に活用し、輩出した人材が活躍
 大学	<ul style="list-style-type: none">リ・スキリングプログラムの収益化、定着コーディネーター人材の育成、確保

リ・スキリングによる



今年度の変更点について

昨年度とは違い多くの講座については経験済みであるため、早い時期から営業活動を開始する。今年度は昨年度の講座をベースに、企業からリクエストがあったマテリアルインフォマティクス（材料開発の効率化）の講義を追加する。

① 講義の見直し

- ・ オンラインやオンデマンドに変更できる点を見つけ、見直しを検討
- ・ マテリアルインフォマティクスの講義を追加

② 大学院への接続を検討

- ・ 社会人コースの加点要素
- ・ 博士課程の入試の際、修士号相当と判断する材料

③ 参加者交流会

- ・ 受講者同士の交流会を検討

④ 受講者の処遇改善に向けた対応

- ・ 受講者の処遇改善を実施した企業については、翌年度のベーシックプログラムの受講の割引・無償化を検討



今年度のリカレント教育プログラムの開講予定

[中部DX推進人材育成プラットフォーム | 国立大学法人名古屋工業大学](https://www.nitech.ac.jp/research/collaboration/dx_platform.html)

https://www.nitech.ac.jp/research/collaboration/dx_platform.html



次世代ものづくりを支える製造AI基盤研究会

次世代ものづくりを支える製造AI基盤研究会

共有知を作るステップが、そのまま個社の課題解決と直結するエコシステム

[設備 / コスト]



名工大の高度分析設備（TEM等）を用いたワークショップによるデータの物理的裏付け。

自社単独では困難な高度技術開発と、設備コストの削減。

[採用 / 人材]



企業のリアルなデータと、学生・若手研究者が交わる現場主導のアイデアソン。

「知の往還」と共創体験を通じた、高度技術人材の直接採用。

「AI-Ready化プロセスへの参画」

[R&D / 効率化]



MI（マテリアルズ・インフォマティクス）やトライボロジー等の分野横断的な共創チームの伴走。

共通基盤データの活用による、既存開発サイクルの劇的な短縮。

[新事業 / 資金]

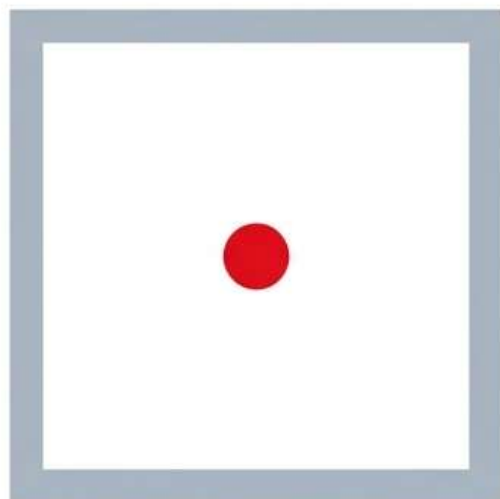


STATION Aiパートナーや名工大の知見の掛け合わせ、およびJST(A-STEP)・NEDO等の外部資金獲得。

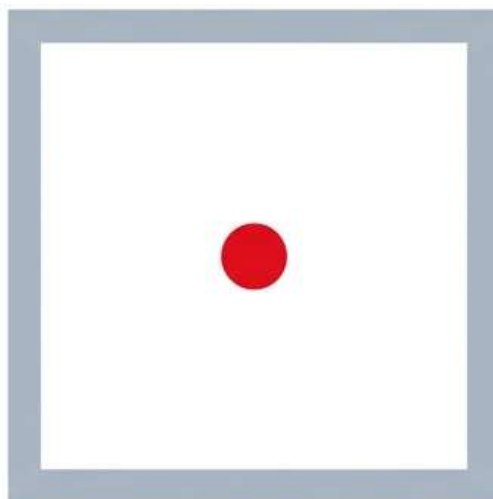
持ち出しを抑えた共同研究の実現と、「新事業の芽」の創出。

「大義名分（全体最適）」と「個社の実利」を両立させる次世代プロジェクトへ。

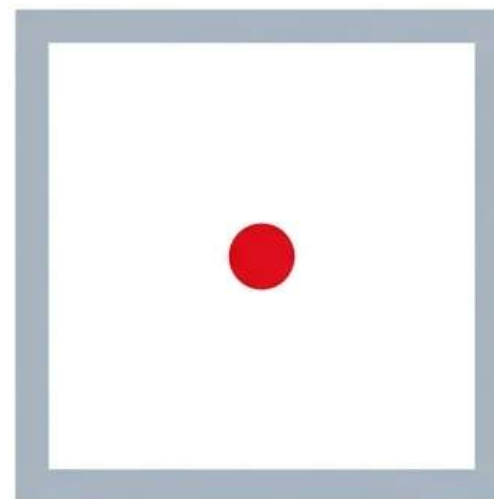
現場に眠る「宝」を、個社の壁が阻んでいる



膨大な実証データ



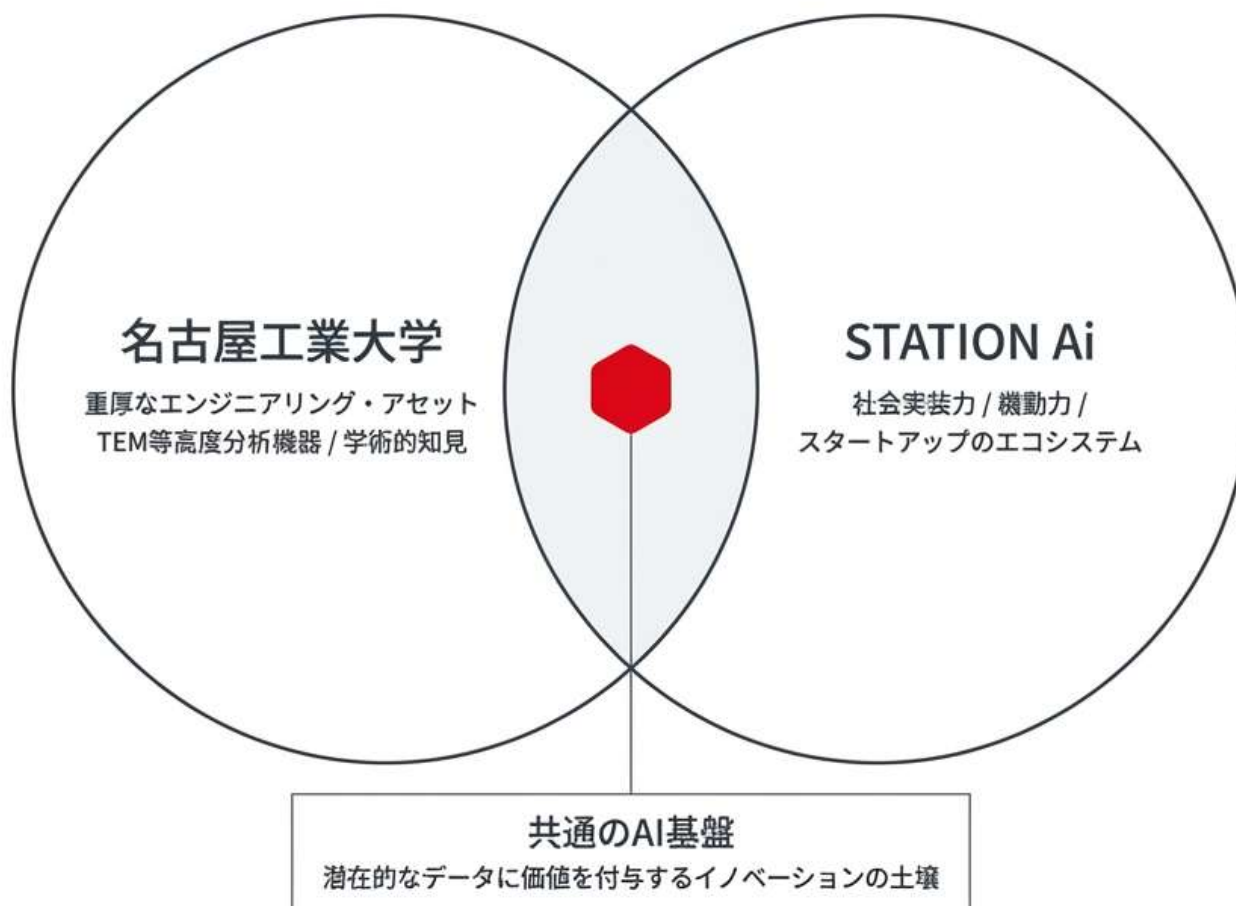
長年の試行錯誤による知見



個社内での最適化に留まる現状

中部圏の産業基盤を支える企業群が蓄積した貴重な資産。
これらは次世代への継承や他分野への波及ができず、極めて重大な課題を抱えている。

実証データと実装力の直結によるエコシステム構築



AIは目的ではない。 価値を最大化する「共通の器」である

	従来型	本研究会
アプローチ	特定の課題解決（点）	<input checked="" type="checkbox"/> 業界の共有知の創出（面）
AIの位置づけ	AI導入そのものが目的化	<input checked="" type="checkbox"/> フィジカルな実証データを 主座に置く「共通の基盤」
データエコシステム	個社に閉じた秘蔵データ	<input checked="" type="checkbox"/> 製造業の共通言語化・ 地域全体の土壌